



公益社団法人

日本認知症グループホーム協会

資料4

# 第2回介護現場革新会議資料

平成31年2月14日

公益社団法人日本認知症グループホーム協会

## 1 業務仕分け・ロボット・ICT・元気高齢者活用の三位一体型効率化

- 業務仕分け、業務フローの見直しなどの研究、実践の成果
- 介護職員の専門性が必要な業務とそうでない業務の切り分け
- 介護助手の採用方法、現場における活躍事例
- ロボット・ICTの活用によるケア記録の省力化や夜勤の効率化

### ①生産性向上の取組例(大阪府のグループホーム)・・・スライド番号3～5

「因果関係図」を活用した、ケアに直接関係しない業務時間、内容の短縮例

### ②介護助手の活用例(三重県のグループホーム)・・・スライド番号6～9

三重県老健協会の取組みを踏まえたGHにおける「介護助手」の活用例

### ③介護ロボットの活用例(北海道のグループホーム)・・・スライド番号10～12

人員が手薄な夜間帯における「見守り支援機器」の活用例

⇒「業務の見える化」

→生産性向上(ムリ・ムダ・ムラの改善)、介護助手の活用、介護ロボットの活用

→業務の再構築＝サービスの質向上、職員の負担軽減、労働環境の改善

## 2. ロボット・ICTの活用

- ロボット・ICTの具体的な活用による好事例

### ③介護ロボットの活用例(北海道のグループホーム)・・・スライド番号10～12

人員が手薄な夜間帯における「見守り支援機器」の活用例

⇒自立支援、リスク軽減、看取り期の方への適切な対応

### 3 介護業界のイメージ改善

- 賃金水準やキャリアアップの仕組みをはじめとする労働環境
- 介護福祉士養成校入学希望者を増やすための取組
- インターンや職場体験などを受け入れる際の受け入れ体制、考え方
- 介護ボランティアや介護相談員などを受け入れる際の受け入れ体制、考え方

④キャリアアップの仕組み例(東京都のグループホーム)・・・スライド番号13

⇒順調にキャリアアップを図れば他産業とも遜色ないレベルの賃金水準を確保

⑤小学生認知症サポーター養成講座の例(福島県のグループホーム)

・・・スライド番号14～16

⑥複数事業所による小学生への認知症劇の例(大阪府のグループホーム)

・・・スライド番号17～18

⇒小学校のころから高齢者、認知症、介護に対して接する機会をもってもらう

→小学校の授業との連携、わかりやすく伝える工夫、高齢者との交流

→「相手を思いやる気持ち」の醸成＝介護への関心

# ①生産性向上の取組例

## ●生産性向上の取組例(大阪府のグループホーム)

○平成30年度厚生労働省「介護サービス事業における生産性向上に資するガイドライン作成等一式事業」モデル事業として実施

○現場の課題の見える化(「因果関係図」の作成による課題抽出)

・事業所内の片付けが十分出来ていないので情報を取り出す事が容易にできない。(ムダ)

・同じことを何度も違う書面に書かなければならない(非効率)。(ムダ)

○生産性向上の打ち手

①書類の転記作業をなくすために、2つの書類を1つにするために新たな様式を作成し運用する。

②書類一本化によって生まれた時間の活用方法を意識づけるシートを作成し、運用する(タイムスタディ)。

③職場環境の整理・整頓を「5S推進シート」を活用して実施する。

※5S(整理・清掃・整頓・清潔・躰)

# ①生産性向上の取組例

## ○成果

①書類の一本化により、午後の書類作成(午前中記載したものの転記作業)の時間の短縮  
70分→10分

②余剰時間は、日勤スタッフの休憩や入居者へのアクティビティを取ることに充てられた。

・午後からの休憩 0分→50分

・午後からのアクティビティ時間 0分→120分

③カルテ記載の時間効率化により、スタッフの気持ちに余裕が生まれ、業務を工夫し、別業務にまわせる時間ができた。

・ミニカンファレンス、歌・ゲーム・生け花などのレクの時間

・入居者への要望への迅速な対応

・入居者とともに外出する機会の増加

・イレギュラーな対応への丁寧な指導

④今回の取組みを行う中でスタッフの意識が変化し、事業所の閉塞感がとれ、風通しがよくなり、スタッフ間で意見が言えるようになった。

⑤スタッフ間の申し送りなどの入居者に対するコミュニケーション時間の増加 40分→70分

⇒書類業務という負荷をとることでスタッフの意識が変わり、チームケアが生まれ、ケアにさらに注力することができた。

⇒ムダを減らし、サービスの質の向上、労働環境の改善につなげることができた。



## ②介護助手の活用例

### ●「介護助手」の活用例(三重県のグループホーム)

- 平成30年度三重県地域医療介護総合確保基金「モデル事業」として実施
- 業務内容(三重県老人保健施設協会による分類)

#### 【Aクラス】

一定程度の専門知識・技術・経験を要する比較的高度な業務  
(認知症の方への対応、見守り、話し相手、趣味活動のお手伝い 等)

#### 【Bクラス】

短期間の研修で習得可能な専門的知識・技術が必要となる業務  
(ADLに応じたベッドメイキング、配膳時の注意 等)

#### 【Cクラス】

マニュアル化・パターン化が容易で、専門的知識・技術がほとんどない方でも行える業務  
(清掃、片付け、備品の準備 等)

⇒上記の分類を踏まえ、事業所に合うように働き方例を設定

#### 働き方の例①

早朝(7時～10時)  
朝食見守り  
下膳  
食器洗い  
清掃(台所、トイレ、居室、  
廊下、リビング、玄関)  
ごみ処理  
洗濯、布団干し

#### 働き方の例②

午前(10時～13時)  
入居者と昼食献立決め  
買い物  
昼食作り  
昼食見守り  
下膳  
食器、台所片づけ  
洗濯

#### 働き方の例③

午後(14時～17時)  
トイレ・床掃除  
手摺消毒  
入居者と夕食献立決め  
買い物  
夕食作り  
夕食見守り

#### 働き方の例④

夕方(17時～19時)  
夕食見守り  
下膳  
食器、台所片づけ  
洗濯  
見守り

## ②介護助手の活用例

### ○募集

- ・市内の全戸に求人チラシを配布
- ・週1日2時間～可
- ・掃除、洗濯、食事づくりなど、介護の補助的なお仕事として募集
- ・元気高齢者を含め年齢問わず募集

### ○事前説明会

- ・10名参加。

### ○就労マッチング

- ・事前説明会后、8名と個別面談。
- ・最高齢69歳の方など3名採用(無資格者)。
- ・10時～13時(週2回)、17時～19時(週2回)、9時～17時(週5回)各1名

### ○研修

- ・職場OJT研修を実施

## ②介護助手の活用例

### ○「介護助手」導入による事業所の効果

- ・入浴介助などの身体介護や行動・心理症状が強い方への対応など専門性が求められる業務と調理や掃除など家事ができれば専門的知識がなくてもできる業務を仕分けることで、介護職員がより専門性を発揮して業務に取り組める環境をつくることができ、また、待遇も手厚くすることができる。
- ・介護職員の負担軽減とやりがいを高めることで離職予防や新規採用にもつながる。

### ○「介護助手」本人にとっての効果

- ・無資格者でも自分の空いている短時間から気軽に始められる。
- ・慣れてきたら時間や日数を増やしたり、介護職員への道(キャリアパス)も用意されているので、介護の世界に入るきっかけになると考える。

### ○「介護助手」を導入した上での課題

- ・小規模事業所の場合、他のパートの職員と効率的・効果的にシフトを組み合わせるうえで工夫が必要である。

⇒グループホームにおいても、「介護助手」導入の効果は十分あることを実感。 8

## ②介護助手の活用例

### ●今後考えられる人材の有効活用方策

#### ○グループホーム入居者家族の活用

- ・毎日面会に来る入居者家族に「介護助手」的な業務をお手伝いいただく。

#### ○認知症サポーターの活用

- ・活動の任意性は維持しつつ、復習も兼ねた現場実習の機会として、話し相手や見守りなど「介護助手」的な業務をお手伝いいただく。

### ③介護ロボットの活用例

#### ●介護ロボットの導入状況

介護労働安定センターの「介護労働実態調査」の結果によると、「認知症対応型共同生活介護」は、「見守り支援機器」を中心に介護ロボットを導入している事業所の割合は増加しており、今後も地域医療介護総合確保基金の活用などによる介護ロボットを導入する事業所は増加するものと思われる。

【参考】介護労働安定センター「介護労働実態調査」

(認知症対応型共同生活介護)

#### ○平成29年度調査

・導入している事業所の割合 6.7%

内訳)※複数回答、上位3つ

・見守り支援機器(介護施設型) 2.5%

・移乗介助(装着型) 1.6%

・コミュニケーションロボット 1.6%

#### ○平成28年度調査

・導入している事業所の割合 5.4%

### ③介護ロボットの活用例

#### ●「見守り支援機器」の活用例(北海道の社会福祉法人)

○導入機器 見守り支援機器(人感センサーマット)

※マットレスの下に設置することでモニターで入居者の動向等を検知できるタイプ

○導入台数 「介護ロボット導入支援事業」の補助金にて法人内の各グループホームに3~4台ずつ購入。

○導入後の効果

(夜勤の効率化)

- ・モニターで入居者の体動の様子が観察できるため、訪室時以外の睡眠状況、夜間のトイレの回数などを把握できる。
- ・むやみに訪室する必要がなくなるため、入居者の安眠や職員の訪室回数の減少にもつながっている。
- ・夜間帯の離床予測に役立っている。入居者の行動・心理症状にも早期に対応でき、転倒リスクが軽減した。
- ・夜間帯のトイレのサインに早めに気づくことができ、失禁前にタイミングよく対応できるようになった。

### ③介護ロボットの活用例

#### ○導入後の効果

(ケア記録の省力化)

- ・心拍、呼吸、体動、離床、着床の各種見守り履歴がグラフ化されるため、医師への報告文書の作成時間の短縮につながっている。

(看取り期の方への適切な対応)

- ・バイタルサインの変化をモニターで常に観察できるため、異変に早期に気づくことができた。医療職との連携やご家族への連絡に役立てることができ、ご家族が最後の時間を共に過ごすことにもつながった。

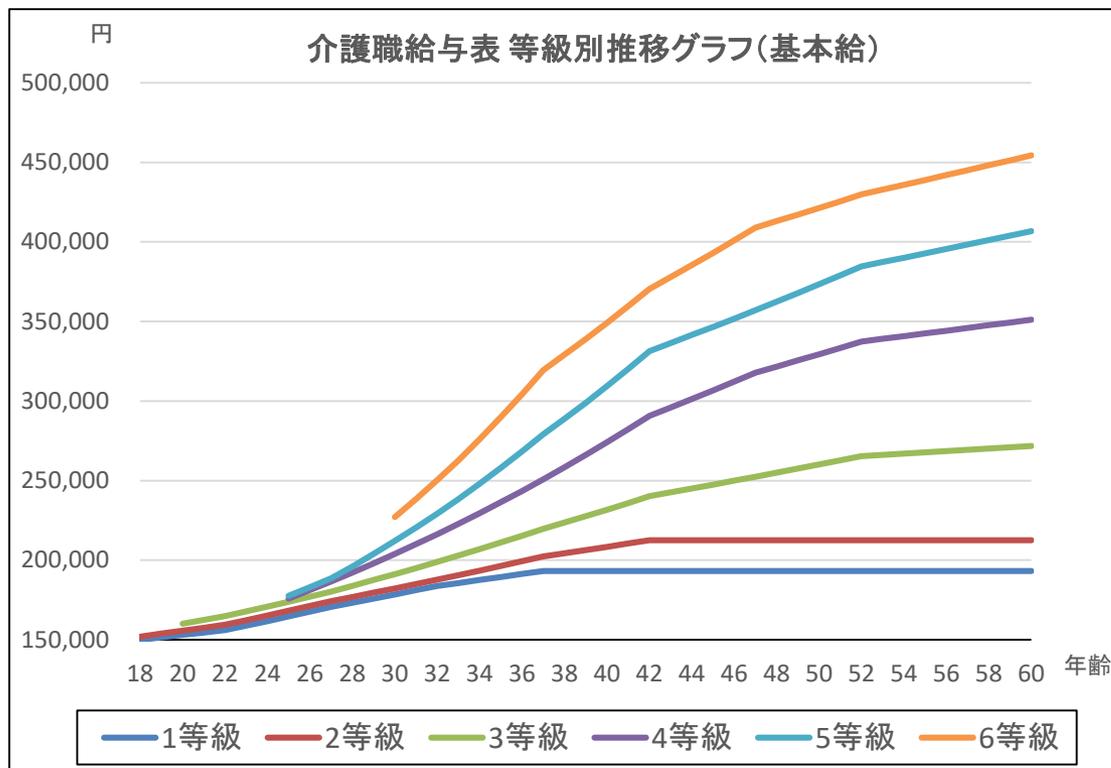
#### ○課題、改善してほしい点

- ・コードレス化、小型化、タブレット化
- ・無呼吸などにセンサーが敏感に反応するため、感度調整が難しい。

⇒認知症グループホームの場合、夜勤者は1ユニット1人の配置であるが、職員の身体的、精神的負担の軽減効果があるとともに、入居者の自立支援、リスクマネジメントや看取り期の方への適切な対応にも効果があった。

# ④キャリアアップの仕組み例

## ●キャリアアップの仕組み例(東京都の社会福祉法人)



等級	資格、職務	職能的評価	評価の目安
1等級	無資格者	補助・単純提携業務	新人の入職者
2等級	有資格者(初任者研修など)	一般提携業務	自分の業務はほぼ自力でできる
3等級	介護福祉士(実務者研修+経験など含む)	複雑提携業務	仕事を組立て指示できる
4等級	施設長・所長級	指導監督・判断業務	事業所における業務統括
5等級	課長級	部門指導監督管理職	法人の業務指導・統括
6等級	部長級	総括管理職	

### ○介護職員(正規職員)実績(年収)

- ①無資格未経験者
  - ・入社1年 28歳 308万円
- ②初任者研修修了者
  - ・入社3年 27歳 350万円
  - ・入社8年 51歳 382万円
- ③介護福祉士取得者
  - ・入社8年 55歳 410万円
- ④主任
  - ・入社7年 38歳 417万円
  - ・入社10年 62歳 445万円
- ⑤管理者
  - ・入社8年 37歳 473万円
  - ・入社13年 40歳 551万円

※経験年数等の給与表への適用

- ・異業・異種の経験年数 勤務年数の3割
- ・同業・異種の経験年数 勤務年数の5割
- ・同業・同種の経験年数 勤務年数の10割

⇒ 順調にキャリアアップを図れば  
他産業と遜色ない賃金水準を  
確保できる。

## ⑤小学生認知症サポーター養成講座の例

### ●小学生認知症サポーター養成講座の例（福島県のグループホーム）

○小学生認知症サポーター養成講座を始めようと思ったきっかけ

- ・平成20年より近くの小学校とサポーター養成講座をスタート。
- ・地域で認知症の人が安心して暮らしていくため、一番身近に暮らしていて支えになる可能性があるのは誰かと考えたときに子どもたちの存在があった。
- ・子どもたちと認知症の人が安心して暮らせる地域には共通するものがあるとの思いもあった。

○認知症サポーター養成講座の開催回数

#### A小学校（6学年、年1回開催）

平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
90名	100名	104名	105名	85名	83名	87名	86名	83名	94名	79名

#### B小学校（6学年、年1回開催）

平成29年	平成30年
85名	実施予定

#### C小学校（6学年、年1回開催）

平成29年	平成30年
38名	44名

## ⑤小学生認知症サポーター養成講座の例

### ○小学生認知症サポーター養成講座の内容

- ・6年生を対象として実施。小学校と事前打ち合わせを行う。
- ・①認知症の理解、②相手を思う気持ち、③具体的な対応、④認知症のまとめクイズ、の4点を大きな柱として独自資料を作成。
- ・講座を受けた後、グループホームに2～3回の訪問を実施。「入居者の方が喜ぶこと」をテーマに、各クラス班ごとに内容を検討し、約45分の訪問時間の中で提供。
- ・認知症サポーター養成講座を学校の学習計画の中に組み込んで頂いている。

### ○今後の展開

- ・市内に16ある小学校に広がるための活動をしていきたい。地域づくりには子どもたちは欠かせないキーであり、10年先にも地域を支えていく役割を担ってくれる存在であると考えている。
- ・学校の授業の一部に組み込まれるようになるとよい。認知症の理解のためだけでなく、人として大切にすることを学ぶ貴重な機会になると思う。

## ⑤小学生認知症サポーター養成講座の例

### ○小学生認知症サポーター養成講座のアンケート結果

- ・はじめは、認知症という病気は重い病気だと思っていたけど、話したり交流しているうちに、普通に暮らしているんだと思った。
- ・認知症は大きな病気だから、認知症の方を支えていかなければならない。
- ・どんな人でもなる病気だと思った。
- ・まわりの人の手助けが少しあれば、普通に生活できるということが分かった。
- ・この交流を通して、人はみな平等であり、どんな病気にかかろうと、だれもが同じように生活する権利があるんだということを学べた。正しい知識を得ることが差別や偏見をなくすことにつながるのだということも知った。

### ○第1回の受講生が高校卒業後、法人のグループホームに就職。平成27年度新入社員代表としてあいさつ。

- ・私がこの職業を選んだ理由は、小学校の授業の一環でグループホームを訪れたことがきっかけとなりました。きっかけを与えて頂いた法人で社会人としての第一歩をスタートできることを嬉しく思います。

⇒現在もグループホームの主力職員として活躍。

## ⑥複数事業所による小学生への認知症劇の例

### ●複数事業所による小学生への認知症劇の例（大阪府のグループホーム）

#### ○啓発活動のきっかけ

- ・平成19年に区内の認知症グループホーム連盟を結成。

※現在は12事業所（社会福祉法人6、医療法人2、営利法人4）

- ・平成21年頃より認知症グループホーム連盟としての活動を考えるようになり、「子ども時代に認知症に対する正しい知識を知ってもらいたい」という思いから、区内の小学校へその趣旨と必要性を説明し、各地で認知症講座を開催した。

#### ○認知症講座の開催回数

平成21年度	2回	平成26年度	8回
平成22年度	9回	平成27年度	18回
平成23年度	7回	平成28年度	9回
平成24年度	7回	平成29年度	13回
※平成25年度から1回老人会、特別養護学校など12回も訪問			

## ⑥複数事業所による小学生への認知症劇の例

### ○認知症講座の内容

- ・まずは、認知症についての説明を座学で行い、その後、認知症のお年寄りを登場人物とした寸劇を行う。登場人物は5～6人で認知症のおじいさんのもの忘れや日々の生活の障害に孫がやさしく接している場面を中心に、3パターン程実施している。
- ・劇団名は、認知症になっても明るく過ごせるよという思いを込めて、「にこにこ一座」という名称をつけている。



### ○認知症劇のアンケート結果

- ・約9割の小学生が「認知症が病気であることを理解した」と回答し、約半数の小学生が「お世話体験」を希望した。
- ・認知症の言葉は知っていたけど、詳しいことは知らなかったのので、劇を見て認知症の詳しいことが分かった。
- ・ヘルパーさんや家でがんばって介護している人はすごいなと思った。



⇒認知症劇は小学校の先生や自治会長、民生委員の方々にも好評で、現在まで継続的な開催となっている。